

大学院生が心理実習に取り組む際の意識 とサポートに関する研究

廣 橋 諒 一

1. 問題と目的

1-1. 心理職の資格

臨床心理士資格は、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会が認定する心理職の資格であり、これまでスクールカウンセラーや公的機関、医療機関等における心理職の採用資格要件として扱われることも多かった。そのため、臨床心理士を目指す学生は、日本臨床心理士資格認定協会が認可する臨床心理士養成課程のある大学院において所定のカリキュラムを履修して修了し、同協会の実施する認定試験に合格することが必要であった。臨床心理士の資格所得者も年々増加し、平成30年度時点では35,912名の臨床心理士が誕生している。そのような中、平成27年9月9日に心理職初の国家資格である公認心理師法が成立し、平成29年9月15日に施行された。これまでも国民のこころの健康に対する援助の必要性が求められていたが、国家資格という国の保証を得た資格が誕生したことは、ますますその必要性が社会に広く認められ始めたと同時に、より一層心理職の質と信頼性についても求められることになったといえる。

1-2. 心理職養成のための実習の位置づけ

このような対人援助の専門家である心理職は、実践家としての技能が求められるため、実践的な教育の場となる実習が重要な学びの場となっている。臨床心理士養成の指定大学院カリキュラム内では、臨床心理基礎実習や臨床心理実習といった実習科目は必修科目の一つとして位置付けられており、学内外の実習施設において受理面接や心理査定、心理面接などを行い、スーパービジョンなどを受けることが求められていた。中村（2005）は、臨床心理士養成課程において、「臨床実習こそが教育・訓練課程における中核的な位置を占めるもの」

と述べ、その重要性を指摘している。

また、公認心理師養成カリキュラムにおいても、大学では心理実習、大学院においては心理実践実習という実習科目として実習が定められており、とりわけ大学院においては中核的な位置づけがなされている。心理実習では、80時間以上の実習時間が定められ、主に実習先での見学等を中心に行いながら、心理支援を要する人や現場のニーズに触れることから学びを得ることになる。心理実践実習では、450時間以上という実習時間が定められ、そのうちケース担当に関する時間は270時間以上となっている。加えて、270時間のうち90時間は学外施設でのケース担当実習と定められており、医療機関での実習が必須となっている。学生は、実際に要支援者や現場スタッフと関わり、心理支援の実践を行うことを通して学びを深めることが求められている。さらに、他職種や他機関との連携、協働といったチーム援助の視点が求められているのも公認心理師の特徴であり、これらのことを実習指導者や実習担当教員によるスーパービジョン、ケースカンファレンスを受けながら学んでいくことが求められている。臨床心理士養成カリキュラムにおいても実践を通じた実習の重要性は認められていたものの、公認心理師養成カリキュラムではよりその重要性が増すとともに、連携や協働、医療機関を必須とした学外施設での実習というキーワードによって、とりわけ他職種と連携をとりながら心理支援の行える心理職を養成するということが一つの方向性として示されたと考えられる。

1-3. 実習における現状と課題

実践的な学びの場となる実習ではあるが、学生はどのように実習を体験しているのだろうか。友清ら（2008）は、適応指導教室で実習を行った大学院生に面接調査を行い、実習がどのように体験されたかをまとめている。その結果からは、「場の理解」「子ども理解の広がりや深まり」「臨床心理学的援助の実際」「臨床心理士の専門性」「その他」という5つのカテゴリーが見いだされたことを報告し、臨床経験の浅い修士1年生の後期に行った実習であっても、学生は多くのことを感じ、学びを得ていることを報告している。また、乾ら（2011）は、大学院生が実習時にもっとも印象に残ったヒヤリ・ハット体験について調査を行い、ヒヤリ・ハットの対応にスーパーバイザーや院生同士、実習先の臨床心理士といった人的リソースが役に立っていたことを述べている。

それでも、多くの学生にとっては初めての現場での実習であり、緊張や不安も抱えながら実習に臨んでいることが考えられる。その点について、岡本ら

(2009) は、大学院生を対象に学校実習に対する意識調査を行ったところ、「実習に対する不安」は実習を継続する中で有意に低下したことを報告している。そして、実習前のわからなさや不安の高さが不安や楽しみな気持ちの変化に関連していたことから、「実習に入る前の段階において、特にこうしたわからなさや不安を緩和できるような取り組みが重要となる可能性」を指摘している。吉川 (2013) もまた、実習の基礎教育を受けるにあたり、実際の現場経験や臨床経験もない学生にとっては、何を実習前に学んでおくべきなのか戸惑っていたこと、臨床におけるオリエンテーションの異なる大学教員にとっても基本となるガイドラインがないことで学生の困惑を助長していたことを述べ、臨床心理実習としての基礎的なガイドラインとなる臨床心理実習マニュアル(友久ら, 2013)を作成し、実習指導を行っている。

このように、学生は実習に取り組む中で様々な経験を得ているが、充実した実習とするためには実習前の学習や実習指導が重要な役割を果たすと考えられる。しかし、実習に関わる先行研究は、心理の専門職を目指す学生を養成する重要な教育機会であるにもかかわらずその数は少ない。さらに中村(2005)は、「社会人として常識的な態度や行動を実習生は身につけておく必要がある」と述べ、挨拶や服装、言葉遣いといった社会常識に起因したトラブルが実習中のトラブルのほとんどであったとしており、臨床に関わる指導を行う以上に社会的場面での振舞い方といった社会常識の指導についても検討していく必要がうかがえる。津川 (2009) も、実習生に関するトラブルでは「一般常識・マナー」であったこと、実習先は社会常識のある学生を望んでいることを指摘した上で、実習のあり方について考えていく必要性を指摘している。そのため、大学院における公認心理師養成カリキュラムにおいて、実習が中核的な位置づけとされてきたことやチーム援助や連携といったことの重要性が求められ始めていることを踏まえると、学生がどのようなことを考えて実習に取り組んでいるのかを把握し、実習指導方法を検討していくことが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、大学院生が実習に取り組む際、どのようなことに意識を向けているのか探索的に調査を行い、実習におけるサポートのあり方について検討することを目的とする。

2. 方法

2-1. 調査対象

近畿圏の臨床心理学専攻に在籍している大学院修士課程1年生12名を対象と

した。調査協力者ごとに「性別」,「年齢」,「実習領域」をまとめたものを表1に示した。

表1 調査協力者

調査協力者	性別	年齢	実習領域
Aさん	男性	20代	医療、教育、福祉
Bさん	男性	60代	教育、福祉
Cさん	女性	30代	医療、教育、福祉
Dさん	女性	20代	医療、教育、福祉
Eさん	女性	20代	教育、福祉
Fさん	女性	20代	医療、教育、福祉
Gさん	男性	20代	医療、教育、福祉
Hさん	男性	20代	医療、教育、福祉
Iさん	女性	20代	医療、教育、福祉
Jさん	女性	20代	医療、教育、福祉
Kさん	男性	20代	医療、教育、福祉
Lさん	女性	20代	医療、教育、福祉

2-2. 調査時期

X年2月～3月

2-3. 調査方法

本研究では、インタビューによる調査を行った。調査協力者に、本研究の趣旨、実施手順、倫理的配慮を書面にて提示するとともに口頭にて説明を行った。研究に協力いただける場合には、同意書に署名をもらった。インタビューは、大学の研究室などプライバシーが確保できる場所で実施した。その後、性別、年齢を聴取し、リサーチクエスションに基づき、半構造化面接を行った。

①リサーチクエスション

「大学院生が実習に取り組む際にどのようなことに意識を向けているのか」

②質問項目

「実習前にどのようなことを意識して実習に臨んだか」

「実習開始以降、どのようなことを意識して実習に取り組んでいたか」

2-4. 分析方法

インタビュー内容については、調査対象者の同意のもとICレコーダーで録

音した。録音されたインタビューの音声データはすべて逐語化し、佐藤（2008）の質的分析方法を用いて、調査対象者ごとに定性的コーディングを行い、継続的比較法による分析を行った。

3. 結果

インタビュー内容を分析した結果、『実習前における意識』、『実習中における意識』、『実習前中での意識変化のきっかけ』の3つの大カテゴリーに分類された。そして各大カテゴリーにおける内容について分析を行った結果、以下の通りであった。結果中の「 」は調査協力者の発言であり、[]は文意の補足を示す。

3-1. 実習前における意識

『実習前における意識』は、『実習の場の活用』、『実習先への適応』、『実習施設に関する関心』、『実習前における知識の獲得』の4つのカテゴリーが抽出された。その結果を表2にまとめた。

1) 実習の場の活用

実習現場でしか学べないことを実際に見聞きして学びを深めたり、これまで学んできた学習を実際の現場を通して深めたり、修正する場にしたいと考えていたことが語られた。

Aさんは、「現地で実地で経験するというのが一番学びになると言うか、やっぱり人とは会わないとその人のこととかわからないですし、〈中略〉理論、紙の上では分からない、その場で起こる交流とかそういうのを色々学べたらいいなあという風に思っていました」（A1）と語った。Cさんは、「何もわかりませんという状態で行くよりは、やっぱりある程度自分の中で学んだものとか、自分で学んだものをそこでいかしたり、修正させたりするっていう場にしたいなと思って」（C1）と語った。Iさんは、「実際のクライアントさんに関わる時にどういう風に関わっていくかみたいな、見立てというかそういうのを考えながら実習に臨みましたね」（I1）と語った。

2) 実習先への適応

12名の調査協力者の内、5名が実習先への適応について言及していた。先輩から医療現場の難しさを聞いていた者や調査協力者自身の内面が影響して不安

表2 実習前における意識

1) 実習の場の活用

Aさん	A1	現地で実地で経験するというのが一番学びになると言うか、やっぱり人とは会わないとその人のこととかかわからないですし、〈中略〉理論、紙の上では分からない、その場で起こる交流とかそういうのを色々学べたらいいなあという風に思っていました
Cさん	C1	何もわかりませんという状態で行くよりは、やっぱりある程度自分の中で学んだものと、自分で学んだものをそこでいかしたり、修正させたりするっていう場にしたいなと思って
Iさん	I1	実際のクライアントさんと関わる時にどういう風に関わっていくかみたいな、見立てというかそういうのを考えながら実習に臨みましたね

2) 実習先への適応

Dさん	D1	「先輩から」医療現場は厳しいところだと聞いていたので、丁寧にしないといけないなと思って。(中略)なるべく自分の発言をしたいなというか。ちゃんと自分の気持ちを伝えるというか、考えとかを発言するようにしないといけないだろうなと
Eさん	E1	できれば行きたくないっていう不安というかそんな感じですね。あんまり活動的な方じゃないので、あんまり新しい場面に突っ込むということはあんまりしない人生を送ってきたんで
Gさん	G1	言ってしまうと大学の看板みたいな感じのを背負っていく感じになるので、とりあえず失礼のないように礼儀作法を、なんとか礼儀正しくしようっていうのを考えて行ったことを覚えてます
Jさん	J1	行った時の第一印象を私は気にしてて。やっぱりその言葉遣いだったりとか、態度一つだったりとか、それで多分今後は変わるんだろうなと思っていたので
Lさん	L1	マナーとかそのルールみたいななんとか、病院ごとにも違うのかなーとか思ったりとか。そうですね、積極的にこれをしにこようっていうより、なんか私が行くことで迷惑になったらあかんみたいな感じの意識の方が強かったのかなーって感じがします

3) 実習施設に関する関心

Bさん	B1	実習先がどのような実習先であるか、どのようなことをさせているのか。そういう概観というか、そういうことがちょっとでも分かりたいと思っていました
Kさん	K1	どういう患者さんとか、またどういう人がそこを利用しているのかっていうのが気になっていて

4) 実習前における知識の獲得

Fさん	F1	文献をciniとかで見たり、本とかで見たりして〈中略〉なんか物事を見るだけでは見学になるので、そこで行われていることの意義とか社会通念というか、その業界で当たり前とされていることを知ってから入りたい
Hさん	H1	心療内科では使われる症状とか自律訓練法でカウンセリングを行う意義であったりとか、そういう本を一通りは見せていただいて、そこはちゃんとおこなったのかなと思って

に感じている者、実習先に迷惑をかけてしまわないかマナーや礼儀を意識していた者がいた。

Dさんは、「[先輩から] 医療現場は厳しいところだと聞いていたので、丁寧にしないといけないなと思って。(中略)なるべく自分の発言をしたいなというか。ちゃんと自分の気持ちを伝えるというか、考えとかを発言するようにしないといけないだろうなと」(D1)と語った。Eさんは、「できれば行きたくないっていう不安というかそんな感じですね。あんまり活動的な方じゃないので、あんまり新しい場面に突っ込むということはあんまりしない人生を送ってきたんで」(E1)と語った。Gさんは、「言ってしまうと大学の看板みたいな感じのを背負っていく感じになるので、とりあえず失礼のないように礼儀作法を、なんとか礼儀正しくしようっていうのを考えて行ったことを覚えていま

す」(G1)と語った。Jさんは、「行った時の第一印象を私は気にしてて。やっぱりその言葉遣いだったりとか、態度一つだったりとか、それで多分今後は変わるんだろうなと思っていたので」(J1)と語った。Lさんは、「マナーとかそのルールみたいななんか、病院ごとにも違うのかなーとか思ったりとか。そうですね、積極的にこれをしにいきこうっていうより、なんか私が行くことで迷惑になったらあかんみたいな感じの意識の方が強かったのかなーって感じがします」(L1)と語った。

3) 実習施設に関する関心

実習先そのものがどのような取り組みを行っているのかということや利用者の実態について知りたいということが述べられた。

Bさんは、「実習先がどのような実習先であるか、どのようなことをさせているのか。そういう概観というか、そういうことがちょっとでも分かりたいと思っていました」(B1)と語った。Kさんは、「どういう患者さんとか、またどういう人がそこを利用しているのかっていうのが気になっていて」(K1)と語った。

4) 実習前における知識の獲得

実習に取り組みにあたって、事前学習を行うことに意識を向けていることが述べられていた。

Fさんは、「文献をciniiとかで見たり、本とかで見たりして〈中略〉なんか物事を見るだけでは見学になるので、そこで行われていることの意義とか社会通念というか、その業界で当たり前とされていることを知ってから入りたい」

(F1)と語った。Hさんは、「心療内科では使われる症状とか自律訓練法でカウンセリングを行う意義であったりとか、そういう本を一通りは見させていたでいて、そこはちゃんとおこなったのかなと思って」(H1)と語った。

3-2. 実習中における意識

『実習中における意識』は、『実習に対する取り組み方』、『利用者との関わり』、『実習先の枠組み・ルール』の3つのカテゴリーが抽出された。その結果を表3にまとめた。

表 3 実習中における意識

1) 実習に対する取り組み方

Aさん	A2	面接室の中でカウンセリングするだけではあんまりこっちにフォーカスしないんだらうなっていう外での出来事みたいなことを、すごい意識してるなっていうことを意識して聞きましたね
Dさん	D2	ここでしか見れないものとか、感じられないものを感じようと。出来る限り吸収できたらなと思って行ったら感じですね
Eさん	E2	結構人との関係を作るのに時間がかかっちゃうタイプなんで、でも時間をかけてる場合じゃない、実習にも時間の限りがあるから、自分から関わっていかないといけないなっていうそこですね
Fさん	F2	その日に入って次の日までの間に、その次に自分がここを見たいっていうことにあわせた事前学習をするようになりました
Jさん	J2	相手が求めているものを自分なりに、言われたらそれをやればいいんですけど、言われなかったとしても考えてやろう
Kさん	K2	実習生とは名乗るんですけど、何が違うのみたいに思われる方もいらっしゃるから、単に学校の延長で来ましたがなくて、ここで実習とはいえ働かせてもらっていますという意識
Lさん	L2	慣れたんでなんか余裕が出てきたみたいな感じとかですかね。周りに気を張っていたのが、このぐらいでいいんやと思ったら、実習内容とか、そっちの方に集中できるようになったっていうのがあるかなと

2) 利用者との関わり

Bさん	B2	子どもたちとどう接するとか、うまく接するとか、そこに先に意識がいきがちでしたね
Iさん	I2	子どもと遊ぶ中で発達的な部分も見ていくんだな—と思ってからは、結構行く回によって年少さんとか年長さんとかバラバラに入れてくださったので、余計にその遊びの部分の発達とか、ごっこ遊びとか言語遊びとかそういう部分を意識しながら関わってましたね

3) 実習先の枠組み・ルール

Cさん	C2	クライアントさんにも今回私が実習生ということは伝えずに、カウンセリングを進めていくということだったので、あんまりその不安な表情とかをクライアントさんの前で出したりしないように、一人の心理師としてケースはやろうと
Gさん	G2	溶け込むというか、あんまり違和感を覚えさせないような形で入らせていただくというのが大切なこと
Hさん	H2	本当に N 病院の場合は突然来んですよ、ケースお願いみたいなのが。お手伝いみたいな感じのことが。〈中略〉なので突然来ても、もしかしてあるかもしれないということは意識して

1) 実習に対する取り組み方

12名の調査協力者の内、7名が実習先への取り組み方について言及していた。実習先のスタッフの動きや実習先での学ぶ姿勢に意識が向けられていたことが述べられた。

Aさんは、「面接室の中でカウンセリングするだけではあんまりこっちにフォーカスしないんだらうなっていう外での出来事みたいなことを、(スタッフが)すごい意識してるな—っていうことを意識して聞きましたね」(A2)と語った。Dさんは、「ここでしか見れないものとか、感じられないものを感じようと。出来る限り吸収できたらなと思って行ったら感じですね」(D2)と語った。Eさんは、「結構人との関係を作るのに時間がかかっちゃうタイプなんで、でも時間をかけてる場合じゃない、実習にも時間の限りがあるから、自分から関わっていかないといけないなっていうそこですね」(E2)と語った。Fさんは、「その日に入って次の日までの間に、その次に自分がここを見たい

ってということにあわせた事前学習をするようになりました」(F2)と語った。Jさんは、「相手が求めているものを自分なりに、言われたらそれをやればいいんですけど、言われなかったとしても考えてやろう」(J2)と語った。Kさんは、「実習生とは名乗るんですけど、何が違うのみたいに思われる方もいらっしゃるから、単に学校の延長で来ましたじゃなくて、ここで実習とはいえ働かせてもらっていますという意識」(K2)と語った。Lさんは、「慣れたんでなんか余裕が出てきたみたいな感じとかですかね。周りに気を張っていたのが、このぐらいでいいんやと思ったら、実習内容というか、そっちの方に集中できるようになったっていうのがあるかなと」(L2)と語った。

2) 利用者との関わり

利用者とのように関わればよいかということや子どもの発達を考慮に入れて子どもと関わることに意識を向けていたことが述べられた。

Bさんは、「子どもたちとどう接するとか、うまく接するとか、そこに先に意識がいきがちでしたね」(B2)と語った。Iさんは、「子どもと遊ぶ中で発達の部分も見えていくんだな—と思ってからは、結構行く回によって年少さんとか年長さんとかバラバラに入れてくださったので、余計にその遊びの部分の発達というか、ごっこ遊びとか言語遊びとかそういう部分を意識しながら関わってましたね」(I2)と語った。

3) 実習先の枠組み・ルール

実習先の雰囲気や実習先の枠組みやルールに沿った行動に意識を向けた発言が述べられた。

Cさんは、「クライアントさんにも今回私が実習生ということは伝えずに、カウンセリングを進めていくということだったので、あんまりその不安な表情とかをクライアントさんの前で出したりしないように、一人の心理師としてケースはやろうと」(C2)と語った。Gさんは、「溶け込むというか、あんまり[実習先に]違和感を覚えさせないような形で入らせていただくというのが大切かなと」(G2)と語った。Hさんは、「本当にN病院の場合は突然来るんですよ、ケースお願いみたいなのが。お手伝いみたいな感じのことが。〈中略〉なので突然来ても、もしかしてあるかもしれないということは意識して」(H2)と語った。

3-3. 実習前中での意識変化のきっかけ

『実習前中での意識変化のきっかけ』は、『スタッフの視点』、『初めての経験による戸惑い』、『実習先の枠組み・ルール』、『学びの振り返り』の4つのカテゴリーが抽出された。その結果を表4にまとめた。

表4 実習前中での意識変化のきっかけ

1) スタッフの視点		
Aさん	A3	いろんな何人かの立場の方が色々意見を言って、利用制度のサービスのことも交えながら一人一人の参加者の方の話とかするんで。なるほどそういうところからも見るんだと思って。作業所行ってからなんかこの人こうだねとか、そういう視点もあるんだなっていう
2) 初めての経験による戸惑い		
Bさん	B3	過去私がかかわってきた子どもたちよりも低年齢なので、どういう風に接したらいいのかちょっとわからない面があって
3) 実習先の枠組み・ルール		
Cさん	C3	挨拶に行った時にも言われてたんですけど、私はできないからとか、私は何も知らないでとかそういうのは、一切やめてと言われていたので
Dさん	D3	M病院にあった立ち居振る舞いとかをしようと思ってたというか、〈中略〉臨床の現場で得られるものを勉強してくださいっていう風に言われ続けた感じがあったので
Gさん	G3	行かしていただいた実習先が結構柔らかいと言うか、ゆったりしているところだったので
Hさん	H3	本当に僕に突然担当が来るかもしれないということは先生も言っていたので。そこは構えていますね
Jさん	J3	なんか相手の雰囲気みたいなのとやっぱやってほしいことを逐一言っていたってということもあるんですね。特に医療に関しては、オリエンテーションの時にこれはだめ、これをしてくださいということを、はっきり言っていたので
Kさん	K3	予診をやらしてもらんですけど、予診の役割みたいなのを〔Dr.に〕伺って、〈中略〉単に学ばしてもらんじゃなくて、そういう仕事なんだあって
Lさん	L3	特に医療は実習先の方のサポートがめっちゃしっかりしてくださってて、毎回入る前に目標を決めて、朝目標を決めてきたのについて話し合ってもらったりとか、こういうところみてみたいんやったらこういうと見てみたらいいよとか、アドバイスをくださったりしたので、〈中略〉目標に沿ってやろうという気はしていました
4) 学びの振り返り		
Eさん	E3	学校専用のがあるんですよ。報告書みたいなのが。それに生徒の様子を書いてくださいみたいなのがあって。それまでは、5回ぐらいまでは自分の反省点とか、懺悔点ばかり書いてたんですけども、よく見たら生徒の様子やんって思ってた。自分と生徒じゃなくて自分のことしか見てないなって思って。あ、生徒みなあかんってそこでちょっと気づいて
Fさん	F3	次に行った時に、自分がこのことを見たいって思うことを先に目標とか決めてから、それに合わせて勉強をすると、勉強した知識を基に焦点を当てて実習の時に活動できたので、それで何かいいのかと思って
Iさん	I3	行く前は漠然と遊ぶってことを思っていたんですけど。行ってみたら結構、子どもと濃密に関わるので。その遊びの部分とか、一人一人の個別的な部分とかもあったので。結構実習を重ねるごとに前のクラスとの差とか、色々比較しながら考えてましたね

1) スタッフの視点

実習先スタッフのやり取りを観察することで、これまでにない視点を獲得したことが述べられた。

Aさんは、「いろんな何人かの立場の方が色々意見を言って、利用制度のサービスのことも交えながら一人一人の参加者の方の話とかするんで。なる

ほどそういうところからも見るんだと思って。作業所行ってからなんかこの人こうだねとか、そういう視点もあるんだなっていう」(A3)と語った。

2) 初めての経験による戸惑い

これまで関わりのなかった年代の子どもとのやりとりに直面したことでかかわりに困惑していたことが述べられた。

Bさんは、「過去私がかかわってきた子どもたちよりも低年齢なので、どういう風に接したらいいのかわからない面があって」(B3)と語った。

3) 実習先の枠組み・ルール

実習先の指導者からの指示ややり取りが実習中の意識変化につながったことや実習先の雰囲気やルールに合わせることがきっかけになったことが述べられた。

Cさんは、「挨拶に行った時にも言われてたんですけど、私はできないからとか、私は何も知らないんでとかそういうのは、一切やめと言われていたので」(C3)と語った。Dさんは、「M病院にあった立ち居振る舞いとかをしようと思ってたというか、〈中略〉臨床の現場で得られるものを勉強してくださいっていう風に言われ続けた感じがあったので」(D3)と語った。Gさんは、「行かしていただいた実習先が結構柔らかいというか、ゆったりしているところだったので」(G3)と語った。Hさんは、「本当に僕に突然担当が来るかもしれないということは先生も言ってたので。そこは構えていますね」(H3)と語った。Jさんは、「なんか相手の雰囲気みたいなのをやっぱやってほしいことを逐一言っていたいたってということもあるんですかね。特に医療に関しては、オリエンテーションの時にこれはだめ、これをしてくださいということを、はっきり言っていたいたので」(J3)と語った。Kさんは、「予診をやらしてもらんですけど、予診の役割みたいなのを〔Dr.に〕伺って、〈中略〉単に学ばしてもらうんじゃないかって、そういう仕事なんだなあって」(K3)と語った。Lさんは、「特に医療は実習先の方のサポートがめっちゃしっかりしてくださって、毎回入る前に目標を決めて、朝目標を決めてきたのについて話合ってもらったりとか、こういうところみてみたいんやったらこういうとこ見てみたらいいよとか、アドバイスをくださったりしたので、〈中略〉目標に沿ってやろうという気はしていました」(L3)と語った。

4) 学びの振り返り

実習の報告書や実習の目標を明確にすることで学びを深めるきっかけにつながったことや実習体験を重ねることで学びを深めたことが述べられた。

Eさんは、「学校専用のがあるんですよ。報告書みたいなのが。それに生徒の様子を書いてくださいみたいなのがあって。それまでは、5回ぐらいまでは自分の反省点とか、懺悔点ばかり書いてたんですけども、よく見たら生徒の様子やんって思っ。自分と生徒じゃなくて自分のことしか見てないなって思っ。あ、生徒みなあかんってそこでちょっと気づいて」(E3)と語った。Fさんは、「次に行った時に、自分がこのことを見たいって思うことを先に目標とか決めてから、それに合わせて勉強をすると、勉強した知識を基に焦点を当てて実習の時に活動できたので、それで何かいいのかもと思って」(F3)と語った。Iさんは、「行く前は漠然と遊ぶっていうことを思っていたんですけど。行ってみたら結構、子どもと濃密に関われるので。その遊びの部分とか、一人一人の個別的な部分とかもあったので。結構実習を重ねるごとに前のクラスとの差とか、色々比較しながら考えてましたね」(I3)と語った。

4. 考察

4-1. 実習前におけるサポート

本研究より、実習前は、『実習の場の活用』、『実習先への適応』、『実習施設に関する関心』、『実習前における知識の獲得』に意識が向けられていることがわかった。そのことから、学生は様々な点を意識して実習に臨んでいることが考えられた。

『実習先への適応』では、実習先のルールやマナーを意識したり、学生自身の実習態度や性格的な面を意識する発言が見られており、実習先にいかに適応できるかということに意識を向けていることが考えられた。また、Dさんが「[先輩から]医療現場は厳しいところだと聞いていたので」(D1)と発言しているように、実習先に関する情報を大学教員以外から聞いている場合もあった。多くの大学では、実習前に実習先の情報を伝えたり、実習態度やマナーなどを学生に指導していると考えられるが、先輩という身近な存在から実習先の厳しさを聞くことでより実習先への適応を意識させられたと考えられる。

このように、事前に実習指導を行っていたとしても、実習先への適応を意識している学生にとっては、どのように実習先に適応すべきかという不安や緊張が背景にはあると考えられる。そのため、学生がどのようなことから不安を感

じているのかを把握しておくことが、必要な情報提供やサポートを行う上で重要と考えられる。

『実習の場の活用』では、事前学習をいかしたり、実習の場でしか経験できないことを学びたいという実習中の状況に意識を向けていた。そして、『実習前における知識の獲得』では、事前学習にきちんと取り組むことで実習の場を有意義にしたいと考えていることが示唆された。それらのことから、大学内での講義等による学習によって必要な知識を身につけさせるとともに、実習前の自己学習によって興味や関心を深められるようにサポートしておくことが必要であると考えられる。酒井（2009）は、講義や文献での知識の積み重ねがなければ、現場で経験することの意味理解につながらないことを指摘している。実習の場を有意義なものにするためには、実習前の学習を積み重ねておくことで、机上と実際の現場での違いを明らかにしていくことが可能となり、学びを深めていくきっかけになると考えられる。

その一方で、『実習施設に関する関心』では、実習施設の概観や施設利用者の実態そのものを知りたいということに意識を向けていた。これは、実習施設に関する情報伝達が不足していたか、もしくは伝わっていたとしても調査協力者自身の実習先に関する事前学習が不足していたことが考えられる。そのため、実習先の施設そのものに意識を向けている学生には、実習先の情報を提供したり、実習先に関する自己学習を促進させるようなサポートを行うことが必要であると考えられる。

以上のことから、実習前におけるサポートを行う際には、1．学生がどのようなことから不安を感じているのか把握すること、2．講義や文献などによる基礎的学習、3．興味関心を深めるための自己学習の促進、の3つの点を考慮に入れておくことが重要であると考えられた。

4－2．実習中におけるサポート

実習中の意識では、『実習中に対する取り組み方』、『利用者との関わり』、『実習先の枠組み・ルール』に意識が向けられていたが、その背景には実習前と実習中での意識変化のきっかけとなった、『スタッフの視点』、『初めての経験による戸惑い』、『実習先の枠組み・ルール』、『学びの振り返り』が影響していた。その中でも意識変化のきっかけとなった『実習先の枠組み・ルール』は調査協力者の多くが影響を受けていた。Gさんの「行かしていただいた実習先が結構柔らかいと言うか、ゆったりしているところだったので」（G3）のよう

に実習先の雰囲気によるものもあったが、多くの調査協力者は実習先の指導者やスタッフとのやり取りが実習中の意識の変化に影響を与えていた。このことは、『スタッフの視点』におけるAさんにおいても、「いろんな何人かの立場の方が色々意見を言って、利用制度のサービスのことも交えながら一人一人の参加者の方の話とかするんで。なるほどそういうところからも見るんだと思って。」(A3)と述べており、間接的ではあるものの実習先のスタッフからの影響を受けていた。つまり、多くの学生にとって実習現場での実習指導者やスタッフとの出会いが実習中の意識を変化させ、『実習に対する取り組み方』や『実習先の枠組み・ルール』を意識させることになると考えられた。

さらに、実習先の指導者やスタッフとの関わりには2つの側面があることも考えられた。一つは、安心感を与える面である。実習前に『実習先への適応』を意識していたDさんやJさん、Lさんは、実習中は『実習に対する取り組み方』に意識が変化していた。これには、実習先の指導者やスタッフとのやり取りを通じて、『実習先の枠組み・ルール』が理解できたことで安心感が生まれ、意識の変化が生じたのではないかと考えられた。そして、もう一つは、実習に対する緊張感を与える面である。Kさんのように実習先の医師とのやり取りを通じて、『実習に対する取り組み方』を意識した場合やCさんやHさんのように実習先の指導者から実習先の枠組みやルールの説明を受けたことで、実習中も『実習先の枠組み・ルール』を意識して実習に取り組んでいる場合があった。これらは、実習先の指導者やスタッフとのやり取りを通じて、ある種の緊張感をもって実習に臨むことを意識させる面があったのではないかと考えられた。吉川(2009)は、支援者が所属組織における目的や特性の影響を受けることを指摘し、自らの置かれている現状を俯瞰して把握する必要性を述べているが、実習においても学生は同様のことを体験的に学んでいることが考えられる。そのため、実習先の指導者やスタッフからの指示や指摘の意図を実習生なりに考え、理解していく姿勢が求められると考えられる。ただし、「指導者は、クライアントに対して負荷のない手続き・方法の中での選択の結果として、実習構造を決定しているのであって、指導者の指示に従った行動をすることが不可欠であり、間違ってもその実習構造を混乱させるようなことがあってはならない(吉川, 2013)」と指摘されているように、あくまで実習という構造の中で活動していることには留意しておく必要がある。そのため、学生は疑問や不明な点があれば必ず実習先の指導者に確認をするなどして、実習のルール枠を超えない形で学びを深めていくことが大切である。また、学生を実習先に送り出す

大学教員は、実習先との情報共有を図り、実習先のルールを把握するとともに実習指導で不都合なことがあれば双方で調整ができる連携、協働体制を確立しておくことが重要であると考えられる。

次に、『学びの振り返り』では、Eさんは報告書での振り返りを通して、Fさんは実習における目標設定を通して、Iさんは実習を重ねるごとでの比較を通して、『実習に対する取り組み方』や『利用者との関わり』といった実習中の意識に変化を与えていた。生塩（2009）が、実習ノート为例に記録をつけて振り返る作業は客観的に実習体験を深め、気づきの感性を養う手段になりうることを述べているように、学びの振り返りが実習体験を深めるきっかけにつながっていたと考えられた。そのことから、学生が学びを振り返るための実習ノートやスーパーバイズなどの振り返りを行う機会を用意しておくことは、実習内容に対する気づきの機会になると同時に実習体験を深めていくきっかけになると考えられる。

そして、『初めての経験による戸惑い』では、Bさんから「過去私がかかわってきた子どもたちよりも低年齢なので、どういう風に接したらいいのかちょっとわからない面があって」（B3）と語られ、これまで経験したことのない体験によって戸惑いが生じ、実習中は「子どもたちとどう接するとか、うまく接するとか、そこに先に意識がいきがちでしたね」（B2）につながっていた。このことから、これまでにない低年齢の子どもとの関わりという体験に直面化したことで、そのことに意識を向けざるを得なかった状況が示唆される。学生にとって多くの場合、実習は初めての出来事と向き合うことになる。そのため、実習という機会をいかして学生自身が利用者と向き合い、学びを深めていくことは重要であるが、学生がそのことに戸惑いや行き詰まりを感じていないか学生の状況を把握しておくことも重要であると考えられる。

以上のことから、実習中におけるサポートを行う際には、1. 実習先との連携、2. 学びを振り返る機会、3. 学生の戸惑いや行き詰まりの把握、の3つの点を考慮に入れておくことが重要であると考えられた。

5. 今後の課題

本研究では、大学院生が実習前と実習中にどのようなことに意識を向けているのか探索的に検討し、サポートのあり方について検討した。しかし、本研究では、調査協力者が様々な実習領域での実習を行っているものの、その比較検討まではできていない。また、実習の学びを深める方法として、大学内での実

習指導者との振り返りも考えられるが、本研究ではそれに関わる結果は得られなかった。そのため、それらの点について今後より詳細な検討を行い、サポートの仕方を明らかにしていくことが必要であるとする。

引用文献

- 乾吉佑・吉田雅明・森本麻穂・下平憲子・加藤佑昌・井上美鈴（2011） ヒヤリ・ハット体験から学ぶ心理臨床，専修人間科学論集心理学篇，1-1，pp. 31-45
- 中村博文（2005） 臨床心理士養成課程における実習に関する一考察—本質と成立の条件—，鑑幹八郎（監修），心理臨床家アイデンティティの育成，創元社，pp. 115-126
- 岡本淳子・永井智・佐藤秀行・下山晃司（2009） 臨床心理外部実習における学校臨床心理実習—大学院生による実習の受け止め方から実践のあり方への考察—，立正大学臨床心理学研究，8，pp. 15-21
- 生塩詞子（2009） 送り出す教員の立場から，津川律子・橘玲子（編），臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド，誠信書房，pp. 168-184
- 酒井佳永（2009） 大学病院精神科での実習を終えて，津川律子・橘玲子（編），臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド，誠信書房，pp. 67-86
- 友久久雄・吉川悟（編）（2013） 臨床心理実習マニュアル，遠見書房
- 友清由希子・岩橋知子（2008） 院生は学外の臨床心理実習で何を学んでいるのか—教育臨床領域における実習の振り返りから—，福岡教育大学紀要，第57号第4分冊，pp. 63-70
- 津川律子（2009） 臨床心理士になるための指定大学院における実習カリキュラム，津川律子・橘玲子（編），臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド，誠信書房，pp. 2-15
- 吉川悟（2009） 現場の違いと求められているもの，吉川悟（編），システム論から見た援助組織の協働—組織のメタ・アセスメント—，金剛出版，pp. 9-20
- 吉川悟（2013） はじめに，友久久雄・吉川悟（編），臨床心理実習マニュアル，遠見書房，pp. 3-5

キーワード 心理実習 意識 サポート